

1-07 作業選択の共有によって活動性の拡大を認めた透析療養患者の一例

○二階堂 友唯(OT)¹⁾, 鈴木 耕平(OT)²⁾

1) 医療法人華頂会 琵琶湖養育院病院

2) 学校法人藍野大学 滋賀医療技術専門学校

Key word : 役割, 作業, 活動性

【はじめに】慢性期病棟にて、透析療養により長期入院となっている90代女性を担当した。日常生活動作能力は高く、院内は大きな支障なく過ごせていたが、認知機能低下が認め始めていた。今回、文化的背景から意味のある作業を本人と共に選択し共有する中で、他者との交流の機会を増加させ、認知機能と活動性の向上に至った事例を経験できたため、以下に報告する。尚、今回の事例発表にあたり、本人と御家族より同意を得ている。

【事例紹介】90歳代女性。入院前はカフェを経営しており、人に喜んでもらうことが好きであった。X年Y月Z日より転倒を繰り返し、両側に人工骨頭置換術が施行されている。その際、末期腎不全と診断され、透析治療を開始。危険認識が不十分であり、透析治療・療養目的で当院入院。血液透析は3/週。

【作業療法評価】BI85点であり、手引き歩行も可能であったが病棟内ADLは車椅子移動。全般に軽度介助であったが常に恐怖を訴えた。ROMと筋力は顕著な制限や低下は認めず。MMSEは18点(減点:見当識計算, 遅延再生, 文の復唱)。落ち込みなど気分変動により認知機能に大きく影響した。興味関心チェックシートでは編み物や絵画などを「してみたい」とするが意欲は低かった。病棟では自室で時折日記を書く程度。月に1度の娘との外食を楽しみにしていたが、「迷惑をかける」等の発言があり。

【介入の方針と計画】生活史より、カフェ経営の習慣からもたらされる役割に着眼する必要があると考えられた。つまり、ふるまうことの喜びに近しく、また本人にとっての称賛となる作業選択が期待された。作業活動は本人と共にリハビリ室扉に季節に合わせた壁紙を作成することとした。

【介入経過】

前期(介入開始~1カ月): 季節に沿った絵の見本を用意し、本人と選択。後に、ちぎり絵で季節の花を作

成。最初は不安感が強い様子があったが、徐々に笑顔もみられていった。この時期では他のスタッフへと本人への称賛する働きかけを依頼。

中期(2カ月目): 季節が変わる時期に自ら「七夕かな」と発言し、七夕飾りを作成することにした。この頃には「明日もしたい」「彦星と織姫が必要やね」等の発言が多く聞かれ、自室で自主的に作成した七夕飾りを作業療法時間外でも持ち寄る場面もあり。この頃から作品の掲示場所で作業をする際に、他患者やスタッフからの自然な会話も増加。

後期(3カ月目): 七夕を過ぎると本人から新たな提案があり、花火の壁紙を作成。完成物を持ち、他職種に見せに行くことや、自ら細かな位置を調整し、扉へ貼りつけるといった行為が散見できた。自室で貼り絵を作成し、飾るといった場面が多くなり、病棟スタッフからの声掛けも増加。

【結果】運動機能面とBIの数値に大きな変化は認めず。MMSE25点となり、日時・場所の見当識、遅延再生が向上。病棟生活では自室で折り紙や貼り絵等の作業を再開し、離床時間が増加。動作時に「怖い」等の訴えや気分変動が減少した。

【考察】カフェの店主として、客へと喜びを提供していた習慣・役割をもった本人にとって、病院生活は、他者に迷惑をかけない為の生活となっていた可能性があった。また、週3回の約5時間に渡る時間的拘束に加え、食事制限や病棟内の活動制限は、喪失感や無能感を助長させていたと考えられた。今回、リハビリ室出入口という人の行き来が多い場を活用し、個人の作業から他者交流へと繋がる環境を設定した。経過後期では、他者の称賛によって、徐々に生活の場へと行為が連鎖していった。運動機能面やADLに良好な変化は認めなかったが、本人の行動の変化からは、数ある制限の中から主体性を引き出した関りとなったのではないかと考えられた。